中学校音楽科　学習指導案

指導者　原　寛暁

日　　時　2018 年 6 月 14 日（木）第4限（11：10 ～11：50）
場　　所　第2音楽教室（グループ練習は第1・第2音楽教室に分散）
対象クラス　中学校　第１学年B組　40名（男子　19名，女子　21名）
題　　目　「評価活動を取り入れたグループ歌唱の取り組み」

授業について

新しい中学校学習指導要領の「２　音楽科改訂の趣旨及び要点」の中に,「感性を働かせ，他者と協働しながら音楽表現を生み出したり，音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと」という記述がある。日頃の授業の活動の中で，生徒たちは楽器（アルトリコーダー）演奏・合唱に関わらず自己評価・相互評価を積極的に取り入れている。

対象クラスの生徒たちは，器楽演奏・歌唱に関わらず積極的に楽しく活動することができる。反面，演奏評価（自己評価・相互評価）の際には適切かつ具体的に言語で表現することがまだ充分に出来ていない。この自己評価と相互評価については，現在の初期段階においては，授業者の適切なコントロールが必要であると感じている。つまり，以下のような道筋を示すことへのフォローである。①演奏の中の何（音楽の要素）について，成果と課題があるのかを指摘する力。②課題の原因と，具体的な改善方法を考え提案する力。
③成果について，適切に肯定的評価を行う力。
これらを，生徒たちは具体的に自分の言葉で語れるようになってきている。しかし，総合的かつ未分類・感覚的な評価に留まっているので，授業者はその部分に介入しフォローしている。現段階では上記の②についてはまだ難しいので，①と③についてしっかりと自分の言葉で語れるように，導いている。このように数多くの評価の場面を経験させることで，自ら「自己学習力」を少しずつ育み，色々な種類の音楽活動に向け，活用の幅を拡げていくことがねらいである。また本時は,「混声 3 部合唱に向けての橋渡しとしての」斉唱教材の取り組みという意味づけもある。今後は男声は女声から独立して機能するようになるので,「自己評価・相互評価」の場面から「課題発見（解決）」する道筋をたどるトレーニング，と捉えている。

教　　材　「浜辺の歌」　林　古渓　作詞　成田　為三　作曲
目　　標　1. 斉唱曲への取り組みを通し，響きを聴き合いフレーズの意流れを意識して表現できる。
　　2. 自分のグループ・相手のグループの演奏を鑑賞し，適切に評価し課題を発見することができる。

学習計画（10 時間：本時はその第 6 時）～アルトリコーダーは，大抵は同時展開で取り組み。本時は無し。
第 1 次・・・同声 2 部合唱「エーデルワイス」の取り組み（3 時間）
第 2 次・・・斉唱「浜辺の歌」と歌唱練習・・・・・・・（3 時間：本時は 3 時間目）
第 3 次・・・混声 3 部合唱「夢の世界を」への導入練習・・（2 時間）
第 4 次・・・パート練習の導入・録音・・・・・・・・　（2 時間）

本時の学習目標

1. グループ内で聴き合いながら、響きを意識して声を合わせることができる。
2. 相手のグループを細部まで鑑賞し，適切に評価をすることができる。
3. 課題から，解決への糸口を発見しようとする（授業者の支援を得ながら）。

本時の学習過程

流れ・学習内容	生徒の学習活動	指導上の留意点・評価
＜導入＞ ・発声練習 ・既習曲の合唱 （10 分）	＊　本時の流れ・ねらいの確認 ＊　発声練習 （母音練習・スケール練習） ＊　既習曲の合唱 ・今行った合唱の自己評価 ⇒　パートリーダー＋α	＊　板書を示し確認 ＊　ピアノ伴奏・板書 評価：学習したことが生かされているか ＊生徒の自己評価を，次の曲につなげる
＜展開＞ ・「浜辺の歌」授業者の歌唱の鑑賞・評価 （8 分）	＊　授業者の歌唱を鑑賞① ⇒　評価を試みる ⇒　授業者への評価を分類する ⇒（解決方法の発見に挑む） ＊　授業者の歌唱（改善されたもの）を鑑賞②	＊　CD 伴奏を再生 ・授業者は歌唱：意図的にいくつかの課題のある歌唱をやってみせる。 ⇒「私はどんな練習をしたら，もっと良くなる？」 評価：適切に観点を述べることができているか ＊「相互評価」への布石
・斉唱練習と ・グループ練習 （5 分）	＊　旋律線と歌詞を思い出す ＊　全体斉唱の自己評価 （教科書に，気づきを書き込み） ＊パートリーダー中心に，グループ練習を進める	＊巡回指導と支援 評価：自己評価を取り入れているか
・相互発表と鑑賞 （10 分）	＊歌唱発表　⇒　成果・課題の相互評価	＊ CD 伴奏を再生 ⇒発表内容を板書 評価：相互評価は適切か
＜まとめ＞ ・全体斉唱（5 分）	＊練習を生かして歌唱	＊次時への課題を提示 （生徒が発見 or 授業者が抽出）

準備物　伴奏 CD（2 枚）・ＣＤ再生装置・マーカー　　**板書計画**　本時の流れと目標（時間設定）

実践上の留意点

１．授業説明

中学校第１学年のクラスで，授業日までの１学期の流れは主に合唱活動と器楽活動，鑑賞活動をバランスを取りながら進めていく流れを経過していた。対象クラスは，この校内研究授業に至る２時間を大学院の「実践的検証」の授業に充てており，その流れに則った授業展開を構想し，それを校内研究授業に繋げたものであった。

本授業のねらいは，活動の中で取り入れている自己評価と相互評価を主軸に据える，というものであった。この段階のクラス集団は，演奏評価の際に適切かつ具体的に言語で表現することがまだ充分に出来ていない状態であった。授業者の適切なコントロール（①演奏分析②課題発見・解決方法の工夫③肯定的評価の道筋の整理）を入れつつ，生徒たちが主体的に活動できるようにフォローを心がけたが，その点において授業者としての働きかけが薄くなってしまった。数多くの評価の場面を経験させることで，自ら「自己学習力」を少しずつ育み，色々な種類の音楽活動に向け，活用の幅を拡げていくことを,主たるねらいとして設定した。時期的に近接した実践となった「実践的検証」の授業では，生徒たちの意識が「大きな声を出す」という一元的なものから、「声の硬さ・柔らかさ」「響きの力強さ・優しさ」という評価観点の拡がりを意識した取り組みになった。それを引き継いだ形での授業展開であった。

２．研究協議より

・生徒同士の相互評価について活発になりつつあると感じたが，授業者に対しての評価と比較して，切り込み方・深まりが薄い。評価・分析やまとめに関して，導き・フォローが必要だと感じる。
・生徒の主体的な活動がねらいというのは分かるが，それを進めていくためには，中１という発達段階に対してもっと授業者として積極的な働きかけがあっても良かったのではないか。
授業者から材料を与え方法論を伝達するという場面が，この授業においてとても少なかった。
・「実践的検証」の授業が直前にあったということだが，そこで培われたことは今日の授業の中で見られたのか。⇒（2 時間のねらいと様子を説明）生徒たちの意識変容は見られたが，それが活動そのものへの変化には充分結びついてはいなかった。引き続き，実践の積み上げと定着が必要と感じている。